

Christopher Houston. *Islam, Kurds and the Turkish Nation State*. Oxford & New York: Berg, 2001, 215p.

トルコ共和国における現行の憲法は、その施行下で採用されるべき国民統合の論理として、「アタテュルクが定めた国民主義の理解 (Atatürk'ün belirlediği milliyetçilik anlayışı)」を挙げている。ケマル・アタテュルクら建国エリートの認識において、「トルコ国民」とは、西洋近代を参照して確立された「世俗主義 (laiklik)」の原則によって規定され、歴史や文化の共通性から結ばれる存在であると想定されていた。しかし、実際の共和国の歴史を通じて、このようなトルコ人としての自意識を創出する試みが、イスラーム復興やクルド・ナショナリズムを掲げる諸勢力の抵抗を呼び、必ずしもその意図する目的まで達してこなかったことは周知のとおりである。「トルコ・イスラーム総合 (Türk-İslam Sentezi)」論の下に、1982年から小中学校での宗教教育が義務化されたこと、また1990年代に入って、クルド語の使用が部分的に認められるようになったことなどは、トルコにおける国民形成のプロセスが、今日も「未完の物語」を紡いでいる証左であると言えよう。

本書 *Islam, Kurds and the Turkish Nation State* は、「トルコ共和国によって最も排除されていると、自らについて認識する人々の見解および歴史解釈に関する研究」として提示されている。予見されるように、その主たる考察の対象は、さまざまなイスラーム復興勢

力やクルド人諸党派・政治組織であるが、本書の各部分は、これらのうちで「最も排除されている」アクターを、順を追って明らかにしていくことによって、トルコの国民統合に伴う問題の所在について指摘するものとなっている。まず第1部では、本書の立脚するフィールドワークの拠点となった、イスタンブール郊外のクズグンジュクにおける地域社会の動態から、トルコのイスラーム復興の多様性が浮彫りにされる。第2部では、偏狭な民族主義的言説としての実態を有する「国民主義」のイデオロギーに対するイスラーム諸勢力の立場が概観されたうえで、排他的なクルド・ナショナリズムの思想の形成過程が論じられる。最後に、本書の最も重要なテーゼを導く第3部では、いわゆるクルド人問題への複数の「イスラーム主義的レスポンス」のなかから、イスラームを基盤とする多元的共存社会に向けた可能性が検討される。

1980年代以降のトルコのイスラーム復興について扱った先行研究群が、概ね文献・資料研究として終始し、国政の場に限定されたイスラーム諸政党の躍進に着目するものから構成されてきたことに対して、本書における顕著な特徴は、およそ2年にわたる地道なフィールドワークの成果を駆使し、社会の多彩な草の根の潮流に焦点を絞っている点に見出される。また、このような潮流のひとつとしてとりあげられている「クルド・イスラーム主義」は、ファン・ブライネッセン [van Bruinessen 1999: 23-24] などによって紹介されてから、詳しい研究のなされていないものであったが、その思想的背景に踏みこんだ

著者の試みは、クルド研究の側からも待望されていたと言えよう。著者クリストファー・ヒューストンは、トルコのほかにも、パキスタンやインドネシアなどをフィールドとする新進気鋭のオーストラリアの社会学者・人類学者である。

第1部は、トルコ国旗の冒瀆として波紋を広げたある国内事件を契機として、クズグンジュクにおいて窺われた、愛国心の急激な高揚に関する叙述より始められる。こうした気運の生成は、国家による国民統合政策の結実として理解できるだろうが、著者によれば、「感情の構造、社会生活の特性、また特定の共同体におけるイデオロギー」としての「地域性 (locality)」の構成においては、経済的・文化的なグローバル化の諸作用も看過できない。たとえば、1980年代以降のイスタンブールでは、「歴史的遺産の保存」や「アイデンティティの独自性への見込み」といったグローバル化にかかわる諸言説が、地域の観光産業と結びついて、モスクやオスマン家屋などの修復・復元を盛んにしたが、このように「その征服期におけるオスマン・イスラーム都市として、イスタンブールを再建するあからさまな試み」は、ヒッタイト帝国をモチーフとしてアンカラの市街を飾りつけた共和国の建国事業との比較において、好対照をなすものであった。本書は、こうして独自の国民統合の実践を目指す運動を、クズグンジュクにかかわる世俗勢力およびイスラーム復興勢力から抽出し、特に後者について紙幅の多くを割いている。

初めに、1994年の統一地方選挙を経て、イスタンブールを含めた28の県庁所在都市の市長ポストを掌握していた、福祉党の政策に言がおよんでいることは言うまでもない。クズグンジュク近郊においては、著名な「フェティフ・パシャの森」が、オスマン様式のカフェやレストランの建設を伴って美化され、酒類の販売がないことや、礼拝所が設けられていることなどから、そこが「イスラーム化された領域」として定着するように意図されていることが、容易に想像できる場となっていた。しかし、大方の予想に反して、著者による描写は、スカーフを着用したムスリム女性が、顎鬚のない世俗主義者の男性と同席し、余暇を楽しむ開放的な雰囲気をつ捉えたものとなっていて、福祉党におけるイスラーム復興への試みが、敬虔なムスリムの「公的領域へのアクセス」の自由を保障すると同時に、彼らを「伝統的イスラーム」の頑迷な束縛からも解放することを伝えるものとなっている。「リベラル・イスラーム主義」と呼ぶこうした福祉党の路線は、その後継のイスラーム諸政党に引き継がれ、さらなる顕在的・潜在的な支持者を獲得することに成功しているように思われる。

一方、これより約1年遅れて「フェティフ・パシャの森」において競合することとなった、より高級なオスマン様式のレストランを中心とする「ブルジョワ・イスラーム主義」の領域は、イスラーム復興運動の戦線の統一化が、決して円滑には進行しえないことを示唆するものとなっている。この領域に関して、著者は、世俗主義に対抗して「ハイ・

カルチャーをめぐる競争」に参入しうるイスラームの適性を証明するため、無知と貧困の根源としてのタリーカ（スーフィー教団）における「ムッラー・イスラーム主義」を排除しつつ、新たな「カウンター・エリート」意識を創りだそうとする場として紹介している。ムスリムの間における経済的な格差を強調し、その共同体を分断することが予想されるこのような「イスラーム化された領域」が、実際に発揮している求心力の程度については、全く触れられていない。

「フェティフ・パシヤの森」で見られるように、トルコのイスラーム復興運動は、複数の方向にわたって展開するものであるが、こうした多様性は、その3番目の方向として言及されている「カーニバル・イスラーム主義」を通じて、運動全体の活性化をもたらす要因としても作用してきた。すなわち、街の広場やサッカー場などが「イスラーム化された領域」として変成される一時的な混沌に紛れて、イスラームの文化的規範やムスリムの同胞精神が、共和国の現体制下では最も急進的に主張されてきた結果、既述の「リベラル・イスラーム主義」や「ブルジョワ・イスラーム主義」の領域は、相対化されて映し出されることとなり、体制の枠組みに沿った現実的な選択肢として、より広範な支持層を得て拡張することになった。このような分析の構図は、具体的なフィールドワークの成果に基づいて導かれているものであるだけに、イスラーム復興の潮流を一括して国家の志向性と対置させる従来のステレオタイプな印象論に比し、より強い説得力を有している。そも

そも、トルコのイスラーム復興運動におけるダイナミックな自己主張と、さらなる飛躍の可能性が、中東で民主主義を最も定着させてきた国家の政策によって保障されているものであることを忘れてはならない。しかしながら、このことによって、イスラーム復興の進展は、自ずとある重大な制約を伴うところとなり、著者の議論は、それを明らかにするようにつけられる。

第2部に移ると、イスラームの言説は、トルコ国家による国民統合を推進する媒体として収斂させられる。すでに述べたように、ケマル・アタテュルクらによって指揮された「国民主義」の展開は、その「世俗主義」の原則を強調するものとなっていたが、政教分離体制としての実体化は、宗教者機構の世俗的な官制への従属化によって、国家が宗教を統制するトルコ特有の方式で果たされてきた。トルコにおける世俗化とは、イスラームが、オスマン帝国期の政治社会諸制度における編成原理としての役割から切り離され、新体制を支える糧として援用されてきた過程であったと理解できる。

このとき「国民主義」の実態が、周知のとおり排他的なトルコ民族主義の諸言説から構成されてきたものであるならば、固有の民族意識を超越する普遍性をもたらす論理であったはずのイスラームにおいて、トルコ人の民族文化にのみ普遍的な価値を賦与し、彼らの民族性との間で、特別に調和的な関係を構築する可能性が推察されよう。著者は、まず「官制化されたイスラーム」のこうした

性向について具体的に検証した後に、国民統合の手法をめぐる共和国の体制に抗してきたイスラーム復興運動全般においても、世俗主義的な西洋近代に対峙する一体のイスラームという図式が設定される過程で、ムスリムの間における民族性の差異が看過され、トルコ民族主義の単一民族国家論が浸透する余地が生じるようになったことを指摘する。このことにおいては、トルコのイスラーム復興勢力の伸張が、前に触れたように、国家の政策と密接に結びついてきたことの影響も無視できないだろう。そして、イスラームによって強化された「国民主義」のイデオロギーの下で、「偏狭な地方主義」として最も排除されるに至ったものが、クルド人の民族的独自性をほのめかすいっさいの政治的な主張であった。

トルコ国家による国民統合の実践において、イスラームおよびクルド人の民族性が、共にその中心的な論理を形成する直接の契機となる可能性を否定されてきたことは、当然である。しかし、前者が統治の制度に組みこまれて、個々人の私的な信仰の領域に止められながらも、「トルコ国民」の紐帯を維持する不可欠な要素として、公然と利用されてきたことに対して、後者は、それを育んだ歴史や文化の抹消を目指す、一貫した同化の試みにさらされて、固有な存在として認知されることさえ稀であった。国家体制を維持する側にとって、果たしてどちらが、より大きな脅威として受けとめられてきたのかは一目瞭然であろう。また、共和国の民族政策は、クルド人としての自意識を保持したまま生きる

人々の社会生活に対して、実に多くの困難をもたらすものとなったが、著者によれば、クルド・ナショナリズム運動も、こうした政策における理念を範として排他的な民族主義のイデオロギーを掲げるに至り、国民の二極分解を、より急速に促進することとなった。

第3部の目的は、トルコのイスラーム復興運動が、「民族性やその他の特殊主義に取って代わる」言説において、トルコ人とクルド人の調和的な共存を達成するための条件を探ることにある。そのために、運動の担い手たちにおけるクルド人問題へのレスポンスが、「国家統制的イスラーム主義」、「イスラーム主義」、「クルド・イスラーム主義」と称される3つの類型にまとめられたうえで分析されている。

まず「国家統制的イスラーム主義」とは、信仰の守護者・伝道者としての歴史的役割をオスマン朝などのトルコ系諸王朝に見出し、これを今日のトルコ人にも課せられた聖なる使命と自覚することから、クルド人の民族性の認知を要求する主張に対して、イスラームに反する動きとみなし、共和国の同化政策と専ら同調する立場である。したがって、こうした立場は、クルド人問題の究極的な解決を「クルド性 (Kürtlük)」の抹殺のみに期待するのであるが、本書の考察において、著名なイスラーム指導者であるフェトフラー・ギュレンの運動に、その典型が求められていることに対して、トルコ人政治学者ハカン・ヤヴズは、ギュレンによって想定される「トルコ性」が、クルド人の民族性をそのなかに包摂

して認知するものであることを主張し、著者の見解を批判している [Yavuz 2002]. その独自のメディアおよび教育のネットワークによって広く知られているギュレンの運動は、実際に、さまざまな異なる評価を与えられているものである。ただ、著者によって提示されている3つの類型は、ひとつの運動のなかでも併存しうることが前提とされた柔軟な分析の枠組みであり、ギュレンの立場を「国家統制的イスラーム主義」として静態的に捉えているものではないことを理解する必要がある。仮にギュレンの立場が、クルド人の固有な民族性の居場所を、その他の社会的紐帯の従属下に置くものであるならば、クルド人問題に対する彼のレスポンスは、むしろ次の「イスラーム主義」に近いものとして分類しうるように思われる。

「イスラーム主義」の立場は、言語の使用などの文化的諸権利を、トルコ人とクルド人の双方に等しく認める一方で、ナショナリズムの思想の浸透によって、これらを紐帯とする共同体意識が政治化されたことに、クルド人問題の所在を見出し、民族性の差異を超克する社会的紐帯としての、ムスリムの同胞精神の復権を主張する。このとき、共和国の現体制が、西洋近代に発する世俗主義的な思想潮流に依拠して、ムスリムの連帯を分断するものとなっている以上、問題に対する根本的な解決は、イスラームの正しい理解および実践を遵守する、新たな政治体制の実現に求めるほかはないと考えられている。しかしながら、イスラームにふさわしい体制の建設が、政治的な理念のうちに止められている現状

において、このようなスタンスは、クルド人の民族的な権利について、何らいっさいの積極的な保障を与えるものとはならない。それどころか、こうした論理の展開は、「民族性の上で中立な政治的アクター」として自らを顕示するものの、世俗主義的なトルコ/クルド・ナショナリズムを掲げる諸勢力との間において、国民統合のプロセスのイニシアチブを勝ちとることに、あくまでも主眼を置いているために、クルド人にとっての問題を、トルコにおいて抑圧されている全ムスリムの問題の一部として埋没させかねない。著者の考察によれば、結局、民族的独自性を宗教の紐帯の下位に縛りつけようとする「イスラーム主義」の試みからは、トルコ国家におけるクルド人への敵意を、その固有な民族性より、むしろその敬虔な信仰に由来するものと恣意的にみなす議論や、クルド人問題の存在すら否定するような態度が、しばしば抽出される。

以上における2種類の立場が、共にイスラームの名における自らの普遍性を強調して、純粋にクルド人の民族的な要求に立脚する政治活動の伸展を阻害することに対して、著者の結論は、これらとは異なるイスラームの理解に立つ「クルド・イスラーム主義」の立場に、概して同情的なものとなっている。後者は、排他的なトルコ民族主義の言説に対しては、イスラームの包括性を擁護するものとなるが、多様な民族性をすべて神の被造物として受容し、多元的共存社会としてのムスリム/非ムスリムの共同体の本質を自明視する観点から、クルド人のように、民族意識

に基づく自己規定の可能性が狭められている人々の境遇については、それを広げるよう努めることこそが、イスラームの理念に沿う営為であると考えている。そして、このような考えを受けて、著者自身もまた、イスラームを媒介とするトルコ人とクルド人の融合が「根本的にイスラーム運動の闘争における行動理念の多元化にかかっている」ものであることを断じて、「国家統制的イスラーム主義」の独善性と併せて、ムスリムの一元性を前提とする「イスラーム主義」の排他性を、その最大の障害として挙げるに至る。前に紹介したヤヴズは、トルコ民族主義にやや傾倒する立場から、著者による分析を「クルド・ナショナリズムの『シンパ』」のものともみなして、その学問的中立性の欠如を批判しているが、少なくとも現時点における「クルド・イスラーム主義」の立場は、既存の国民国家の枠組みにおける共存の方法を追求する方向に傾いているように窺われ、これを残された手段としての武装闘争に訴える分離主義に転じさせる前に、その主張するところを誤解のないように受けとめ、クルド人問題に対するひとつの選択肢として浮上させることが重要であろう。ただ、問題に関する研究者サイドの二極分解は、くれぐれも回避しなければならない。

初めに評したように、本書において最も着目される点は、著者のフィールドワークの体験に基づく生き生きとした叙述であり、そこでは、トルコのイスラーム復興やクルド・ナショナリズムの潮流が、それぞれ単一のベク

トルによっては規定しえない運動体として描写され、前者にいたっては、国家の指導原理と明確に同調する志向性さえ包摂したものとして論じられる。フィールドワークの成果が得られた1994年10月から1996年12月にかけては、福祉党が政権を獲得し、またPKK（クルディスタン労働者党）による武装闘争が著しく伸張していた時期であったにもかかわらず、その他の多様なアクターに対する眼差しをも保ちえていることは、本書における優れた取組みとして評価できるだろう。

一方、本書を通じた議論の展開が、フィールドワークの諸条件に大きく規定されたものとなっていることも、付言しておく必要がある。たとえば、第1部において、「ムッラー・イスラーム主義」を無知と貧困の根源として捉える「ブルジョワ・イスラーム主義」の伸展について述べる時、著者の視点は、1980年代以降における軍や治安部隊などとPKKとの戦闘の激化を受けて、東部のクルド住民が、イスタンブールやアンカラを始めとする大都市に移住し、「ゲジェコンドゥ (gecekondu)」と呼ばれる低所得者居住地域を誕生させた状況を反映したものとなっている。しかし、タリーカに絞って考察すれば、それがクルド人の信仰実践を規定する役割を担ってきたことは確かであるものの、そのムッラーまたはシェイフにおける信徒への影響力が、前者の政治力・経済力の弱体化に伴って低下していることも事実である。さらに、評者の経験に限られることではあるが、タリーカに加わる熱心なクルド人信徒においては、世俗高等教育を修了した者も少なくな

い。本書において、タリーカの現況がほとんど扱われなかったことには、やや片手落ちの感が残った。

また同様に、第2部を通じて、排他的なクルド・ナショナリズムの言説の強化について論じる際に、著者の論拠となるフィールドワークの素材が、さまざまな政治的・社会的圧力を経験しながらも PKK への支持を選択する、イスタンブルのディアスポラ社会におけるクルド人の姿のみから抽出されていることも、不十分であるように思われる。これ自体は、大変興味深い事例であるが、クルド・ナショナリズム運動の実態は、それぞれの地域における部族やタリーカの社会的影響力、あるいは言語状況などによって全く異なる様相を呈してきたものである。クルド人問題にかかわるフィールドワークを進めるうえで、さまざまな政治的制約が発生する場合も予測されるが、その総合的な理解に達するためには、実際に「クルディスタン」として憧憬されているトルコ東部における調査を敢行することが望ましい。

第3部において言及されている「クルド・イスラーム主義」の立場は、今後さらなる詳細な研究が期待されるものである。近年にいたって、ヌルジュ運動を始めとするトルコの有力なイスラーム復興運動において、このような立場の台頭が徐々に見受けられるようになってきているが、本書は、これを概観するための格好の教科書となりうる。残念ながら、ここではフィールドワークを通じて収集されたであろうと思われる雑多な文献・資料群の検討を経た、著者における印象の総体が提示

されているに過ぎず、特定の運動の組織や活動の実態と結びついた具体的な議論がなされていることはほとんどない。また著者は、イスラーム復興運動の全般が「真空において存在するのではない」とみて、その展開における社会的・歴史的な文脈を明らかにするよう努めているものの、「クルド・イスラーム主義」に関しては、あたかも1980年クーデタ以後のトルコにおけるイスラーム復興の潮流のなかで、自ずと生成されたものであるかのように描き、それ以前のクルド・ナショナリズムの長い歴史を担ってきたマドラサ（学院）やタリーカのネットワークとの、その思想的な関係などについては全く触れていない。PKKによって掲げられてきたクルド・ナショナリズムの退潮、または路線転換の進行が指摘されている現状において、宗教性を統合したクルド人の民族的要求は、トルコのクルド人問題をめぐる舞台の新たな主役を演じることが見込まれているものであるが、その固有性を明らかにするための研究は、まだ途に就いたばかりである。

引用文献

- van Bruinessen, Martin. 1999. *The Kurds and Islam, Islamic Area Studies Working Paper Series 13*. Tokyo: Islamic Area Studies Project.
- Yavuz, Hakan M. 2002. Islam, Kurds and the Turkish Nation State, by Christopher Houston: Reviewed by M. Hakan Yavuz, *The Middle East Journal* 56(1): 170-171.
- (大庭竜太, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)